

ジョイスの時代のダブリン(11)

YUKI, Hideo / 結城, 英雄

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

62

(開始ページ / Start Page)

43

(終了ページ / End Page)

55

(発行年 / Year)

2011-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007583>

ジョイスの時代のダブリン(11)

結 城 英 雄

性風俗

ブルーム一家の性

ブルーム一家は夫婦ともども性的関心が強い。むしろ、彼らの意識のかなりの割合が性的な問題で占められていると言ってもいい。正常な人々のパーセンテージをかなり越えているだけではなく、その性的な領域の広さにおいて、フロイト博士を始めとする性心理学者たちを喜ばせることだろう。

知り合う前のそれぞれの思い出から始めよう。モリーは、15歳のころ、ジブラルタルでマルヴィー大尉と親密であった。特に彼がインドへ出征する直前の出来事は、彼女には忘れ難い。デートの折、彼女は手を使用してハンカチの中に彼の欲望を取り込み(18.810)、数日間そのハンカチを枕の下に置き、思い出に浸っていたことがある。これは夫には秘匿の事柄である(13.189)。その一方、ブルームも、12、3歳のころから性的に興奮しやすく、プーラフーカの滝への学校の遠足の折には木陰で淫らな夢想到に耽り(15.3353)、また向かいの家の娘ロッチェ・クラークを窃視したこともある(15.3355)。さらに、14歳のころにはハッチ通りで、ブライディ・ケリーという名の娼婦と交わり(14.1068)、その後も娼婦街へ足をふみ入れている。ブルームもこれらのことは妻に黙秘している。

こうした二人の出会いは、モリー17歳、ブルーム20歳の1887年ころのこと、互いに魅了され親密になる。ブルームはモリーに恋文を毎日、時とすると日に2度も送り、彼女の心を煽り、そのころから彼女の下着への執着をあらわにする。モリーもブルームの情熱に刺激され、日に4、5回も興奮を覚え、ペンブルック道路の開業医の診察を受けたこともある(18.1153)。そして二人にとっての何よりの思い出は、1888年6月のホースの丘での求婚の場面である。二人は、海を眺めながら、石南花の木の下で初めて結ばれる。この日のことは二人の意識に繰り返し想起されている。

結婚は1888年10月のことであるが、すでにミリーが宿されていた。家庭は安らぎの空間であり、結婚生活は今日に至るまでの16年間の長きに及ぶ。そして夫婦生活での鮮明な思い出は二つ。一つは、1893年の1月か2月、ピアノ奏者グッドウィン教授のお別れコンサートの後、西ロンバード通りの家に帰宅した夜のこと(8.185)。このときブルームはモリーの足に異常な興奮を覚えた。もう一つは、同年3月、レイモンド台町の家でのこと。通りで交尾している犬の光景にモリーが刺激され、ルーディが懐妊されることになった(6.78)。いずれも夫婦にとって忘れ難い共通の思い出である。

夫婦生活を煽るような情報もあったらしい。モリーは友人のミセス・マスティアンスキーから、奇妙な体位を聞かされ驚いている (18.417)。またダブリンのハーコート通り駅近くの便所で、自分のものを見せる露出狂の男を目撃したこともある (18.550)。ブルームも、『フォート・ビッツ』のようなソフト・ボルノの雑誌に興奮し (15.3261)、シェルボーン・ホテルで上流階級の女性から使用済みの下着を購入したこともある (15.2993)。

逆に、夫婦に危機を招来するような事件もあった。モリーはボーア戦争 (1899-1902) のころ、英国軍人のガードナー中尉と恋に陥り、彼がアフリカに出征するとき、運河の水門のところで興奮しながらキスをした。また歌手パーテル・ダーシーを相手に、聖歌隊席の階段でキスし抱き合ったこともある。ブルームの方でも、女中のメアリ・ドリスコルに手を出そうとしたり、上流階級の見知らぬ夫人たちに猥褻な手紙を送ったりした。それに加え、若い娘に色目を使ったこともある。

ともあれ、1893年11月27日を最後に、ブルーム夫婦は「完全な肉体交渉」、すなわち「女性具有の器官内での射精」を断ってしまう (17.2278)。現在、夫婦の関係は極めて希薄である。こうして本日1904年6月16日、モリーはボイランと関係を持つ。ブルームがマーサという文通相手の女性の手紙に慰められるのも、また海辺で若い娘に欲情するのも、そうした妻への対抗であるだろう。このような事態の理由は定かではない。1894年1月9日の息子ルーディの生後11日目の死と、深い関係があるのかもしれない。ブルームはこのときのことを、「二十八だった。彼女が二十三……ルーディが死んでからはどうしても前のようにはあれが好きになれなかった」(8.608-10)、と回想している。おそらく、息子ルーディが何らかの障害を受けており、ブルーム夫婦は同様の悲劇を繰り返したくなかったのであろう。

本稿では、ブルーム夫婦の問題を性という観点から考察することにする。モリーの不義は妻との関係を清新なものにするためにブルームが画策したことかもしれないし、逆に夫を引き寄せようとする願望がモリーを不義に駆り立てているのかもしれない。いずれにせよ、モリーの不義は物語の核心に関わる事柄である。性という密室の活動も、時代のイデオロギーと無縁ではない。

ブルームと性病

ある研究者によると、ブルームは性病のうちでも、梅毒の末期的段階の「脊髓癆」を患っているという (Ferris)。そしてそのことが息子ルーディの障害の原因ではあったと思われる。医学生のリンチの言葉を使うなら、「病原菌に取りつかれた生物……は発達段階の初期であるほど死亡しがちである」(14.1279)。ブルームも息子の死後、胎児についての当時の流布本、『アリストテレス傑作集』を仔細に読み耽っていた。イプセンの『幽霊』(1881)にも明らかのように、梅毒は母子感染によって、いずれは子供へと伝えられる。

実のところ、ブルームは性的に不能らしく (13.1116/15.3127/15.3160/17.2238)、特有の歩き方をし (7.994/15.191)、膀胱や腸の機能が失調していて (4.510/8.933/15.929)、足や胃に激痛がはしる (15.207/2782) など、特有の症状を呈している。また、息子の死をめぐる「うちの。小さな。餓鬼。赤ん坊。なんの意味もなかった。大自然の過失。健康なのは母親のおかげ。不健康は父親のせい。こんど生まれると

きはもっと幸福に」(6.328)とつぶやいている。この独白はブルームの罪意識の現れとも読める。息子の死は彼に原因があったのかもしれない。

妻の不義に対するブルームの無気力も、そうした事情と無縁ではない。本日1904年6月16日、モリーは、ベルファストへの歌の公演旅行の打ち合せと称し、興業者ボイルンを家に引き入れる予定である。時刻は午後4時。ブルームは迫りくるモリーとボイルンの逢引きに、心を突かれながら何もできない。にもかかわらず、4時を経過した後、彼の不安も鎮まる。実際、帰宅の際には、モリーの不義について、「天賦の本性により遂行する能動的あるいは受動的なすべての自然行為と同じように自然なことである」(17.2179)、と事態を理詰めで得心している。

その一方、モリーは「不しぎみみたいな話よ／あんなにつめたい彼といっしょにくらしながら／あたしがまだしわくちゃばあさんにならないなんて」(18.1399)と愚痴をこぼす。だが少々うがった見方をするなら、彼女の不義は、夫との性生活に不満を抱く妻の側の一方的な行動であるより、夫の気持ちの復位を目論んだ企みとも思われる。モリーには夫の病気に対する猜疑はない。むしろブルームの方が妻の相手であるボイルンの性病に不安を抱いているくらいだ。ブルームは性病の特効薬の貼紙を想起しながら、「もし彼が……／まさか！／え？／いや……いや。／いや、いや。そんなことはないよ。まさか彼がそんな？／いや、いや」(8.102)とつぶやいているくらいだ。ブルームが性病に冒されているかどうか、やはり早急な結論は下せない。第十三挿話の浜辺で若い娘に抱く欲情から判断するなら、ブルームが性病を患っているとも思えない。

にもかかわらず、ブルームが性病を患っていることを示唆する情報が、テキストの随所にちりばめられている。息子の死の責任を自らに帰すると同時に、38歳にして早くも老いを意識しているのである。たとえば、オーモンド・ホテルで歌に聞き入りながら「おれもすぐ年寄りになる」(11.1069)と意識し、昔を回顧した折には「汝が強健という若き幻は奪い去られてすでに虚しい」(14.1075)と描写されている。性に関心の高いブルームにとり、ダブリンは性病の蔓延するきわめて危険な都市であった。ブルームが梅毒の罹患者である可能性は高い。

売 春

事実、売春はダブリンの最も盛んな産業であった(Pearl)。モントゴメリー通りに接する「モント」と呼ばれる一帯が娼婦街を形成しており、ティローン(現レイルウェイ)通り的高级娼家から、マボット(現ジェイムズ・ジョイス)通りやフェイスフル・プレイスの低級娼家まで様々あった。警察当局(C管区)もこの地区を大目に見ていたようで、8月の馬事大会(品評会と馬術大会)の季節には、大変賑わっていた。英国の国王エドワード七世も、兵役に服していた皇太子のころ、また即位後の1903年にダブリンを訪問した際、やはりこの地域に足を踏み入れたと言われている。

モントは娼婦の言葉では「宿(kips)」、「ぬぐら(digs)」、「村(village)」とも呼ばれ、一般の人は「岡場所(bad area)」と称し、ジョイスは「夜の街(nighttown)」と名づけた。リフィ川の北のメイン・ストリート、オコネル通りから徒歩数分の距離に位置する。セント・スティーヴンズ・グリーン公

園ほどの区域である。十八世紀までは閑静な住宅街であり、なぜ娼婦街になったのかその原因は定かではない。港に近いせいもあっただろう。また1803年のロバート・エメットの蜂起後に、あるいは1803年から06年にかけて、ナポレオンの侵略に備えてマーテロ塔が作られたころ、軍人が増強され、この地域に兵舎が一部設置されたためとも言われている。いずれにせよ、この地域には、1860年から1900年までの最盛期にかけて、少なくとも1,600人の娼婦が存在していた。

娼婦にも、「ここは安淫売宿じゃないんだ。十シリングのお店なんだ」(15.4281)と自負する者から、「そりゃたかが一シリングの安淫売だけどさ」(15.4384)と卑下する者まで、「階級」があった。一般的には、かつての汽車の等級に倣って三つのクラスに分類できる。一等の娼家はパリの店をまねた豪華な雰囲気がある。貴族、裕福な商人、船長などがひいきにし、幌馬車で内密に訪れた。二等の娼家は床にリノリウムを敷き、泥炭を燃やしていた。実業家、事務員、卸しの商人などが通った。三等の娼家は入口の階段に娼婦がたむろし、客引きをする。機械工、見習い、兵士、船員などが利用していた。

ちなみに、スティーヴンたちが第十五挿話で訪ねる娼家は、ティローン通り82番地(テキストでは81番地)のバラ・コーエンの経営する店で、83番地のミセス・アーノットの家や85番地のミセス・マックスの家と同じく「高級娼家(flash house)」(15.370)である。スティーヴンたちは一人「10シリング」を支払う(15.1986)。だがそれはカバーチャージに過ぎない。さらに酒と性行為の料金が要求される。特に酒は高く、酒場で1パイント2ペンスのギネスとコップ1杯3ペンスのウィスキーも、娼家ではそれぞれ3シリングと5シリングであった。それでも24時間飲めるため、酒だけを目的にやってくる客もいただろう。トリニティ・コレッジの医学部の学生のように、裏部屋から客の交渉を観察するのを目的にやってくることもあった。

モント以外にも娼家はあった。また路上でも密かな、あるいは公然とした客引きがあった。ドダ河畔の施設通りでも、近くのブッシュ兵舎の兵隊と娼婦が歩いているらしい(13.662)。あるいはグラフトン通りで娼婦と話している知人を目撃したり(「レースの後で」)、フィーニックス公園での男女の逢引きを眺めやることもあった(「痛ましい事故」)。モリーも河岸通りで船員を漁ってみたいと夢想している(18.1411)。セント・スティーヴンズ・グリーンを拠点とするような高級娼婦がいた一方で、低収入を補う必要のあった花売り娘や女中などもいたのである。

当時、成人女性の約3～4パーセント(3,000人から4,000人)が売春に携わっていたという(O'Brien)。娼婦街で部屋を借りることもできたし、下宿屋などもそうした機会を提供していた。事実、『ユリシーズ』第十二挿話の無名の語り手は、『ダブリンの市民』所収の「下宿屋」のミセス・ムーニーのことを指して、「淫売婆のあのおふくろは振りのアベックに部屋をあてがってやがる」(12.814)と独白している。

こうした状況の下、娼婦と関わりを持つ機会が多い。スティーヴンの体験は『若い芸術家の肖像』に鮮やかに描かれている。罪意識に苦しめられた時期もあったが、その後信仰を捨てて再び娼家通いを始めた。フランスへ留学した際にも娼婦と関係を持ち、さらに最近まで馴染みの娼婦ジョージナ・ジョンソンにかなりの金を注ぎ込み(9.195)、ファンバリー小路での経験も忘れ難い(3.379,7.927)。その一方、ブルームの体験は娼婦のブライディ・ケリーとのハッチ通りでの交わりの他、「黒い麦藁帽」を被った娼

婦(10.1244/16.704)との経験もある。また罪意識の形象である「むかしの罪たち」(15.3025)にその過去を告発されているように、様々な倒錯や疑わしい行為も犯してきたらしい。アッピア通りで知合いの女性を娼婦と間違えて声をかけそうになったこともあるし(13.866)、娼婦に猥褻な言葉を話させたこともある(13.867)。ジャメットのホテルでは高級娼婦を目にしている(13.900)。

売春は貧困の現われであり、難しい問題を胚胎していた。娼婦の救済事業に携わっていた博愛主義者たちの多くも、売春を社会の不可避な営為と受けとめていたようだ(Luddy)。したがって、モード・ゴンやA.グリフィスたち民族主義者が異義を唱えたとき、彼らが対象としたのは娼婦たちではなく、むしろイギリスの軍人であった。ダブリンには約5,000人の兵隊が駐留しており、週末にはオコネル通りに大挙して繰り出したため、辺りが騒然とし市民生活を脅かした。彼らはそのことを問題にしたのである。そうでなくとも、イギリスの軍人は民族主義者にとって敵意の対象であった。ブルームは、「モード・ゴンは投書して、兵隊たちの夜間のオコネル通り立入りを禁止せよと要求した。わがアイルランドの恥辱。グリフィスの新聞もこのところそんな論調だ」(5.70)、と独白している。実は、ボーア戦争の際、軍人を入隊させる都合から、駐留軍の綱紀が緩められ、以来その規律が存続していたのである。

軍隊があるところには娼婦がいると言われていたが、とりわけダブリンは英国の軍隊にとって天国であつたらしい。ボーア戦争が終わった時には、「娼婦が忙しくなるだろう」という戯れ詩も書かれた。モントはアイルランドが大英帝国の従属国であったことの明確な指標であった。だがその代償として、駐留兵の三分の一が梅毒に冒されていて、民族主義者が活躍しなくても娼婦が大英帝国を弱体化させると言われていた。ブルームも「性病で腐敗した軍隊」(5.72)とつぶやく。

ヨーロッパの三大売春地帯の一つとして名声をはせたモントも、1910年ころには凋落し、第一次大戦中に一時隆盛したものの、その後はリアム・オフラハーティの小説、『密告者』(1925)に描かれているように、まったくの無法地帯になっていた。こうして1925年3月12日、ダブリン市によってモントが一掃されることになった。名目は衛生設備の不備なスラムを除去することであったが、警察の手を逃れた悪漢たちの巣窟になっていたことも、当局が介入する大きな理由であった。解体作業の際、地下道も発見されたという(Finegan)。

娼婦・性病・性の商品化

売春と密接に関わっているのが性病である。ブルームは娼家の女将、ベラに「梅毒と尿道淋を商っているんだろ！」(15.3498)と語っているが、娼婦は「商品」であるかのように複数の男に体を売り、家庭へと性病を伝播させ、社会秩序を転覆させかねない。その意味では、売春は英国の軍隊だけでなく、ダブリンの一般市民にとっても脅威であつただろう。娼婦の存在は大英帝国に従属する植民地としてのアイルランドを顕在化させるだけではなく、アイルランドそのものの腐敗の象徴でもあつたのである(Wills)。イギリスの物質文明を称して「梅毒文明(syphilisation)」と呼ぶ人もいるが、アイルランドもその文明に「汚染(contamiNation)」されているらしい。

実際、ダブリンの市民の約10パーセントが性病を患っていたという。ブレイクの詩に「通りから通り

へと伝わる娼婦の叫びが「古いイギリスの死衣をおりあげよう」という一節があるが、スティーヴンは「イギリス」を「アイルランド」に換えて繰り返し、アイルランドも同様の運命にあることを示唆している（15.4641）。かくいうスティーヴンも、「おまえはジー・ピー・アイだってさ……痴呆性全身麻痺だよ！」（1.128）とマリガンの言うように、この病に侵され、その「死衣」に包まれるかもしれない。そしてブルームだけではなく、モリーも性病に身体を蝕まれている可能性もある。汚れた下着（4.265）とか、体の変調（15.1149）とか、彼女も感染している証拠と思われる。

十九世紀に、娼婦が絵画などでネズミやシラミと結び付けられたのも、ゆえなきことではなかった。性病のうちでも梅毒や淋病は不治の病として、世紀末の特徴的な隠喩をなしていたのである。ゲーテ、ベートーベン、ニーチェ、ゴーギャンといった著名人も、梅毒にみな苦しんだという。だが娼婦にすべての責任があるわけではない。そもそも、「娼婦」という職業など容認されてはいない。彼女たちの存在はせいぜい警察の記録に留められていたに過ぎない。売春はあくまで生活の手段であったのだ。大飢饉直後に最も娼婦の数が多かったことにも明らかだ。実際、娼婦たちのほとんどが、読み書きもできず、他に生計をたてる方策を持たなかった。彼女たちは往々にして抑圧された「他者」として扱われることが多いが、売春を一時的な「職業」と捉え、結婚する人、ゆとりができて足を洗う人もいた。問題は女性を売春に駆り立てるアイルランドの貧しい経済、ひいては性の商品化を許容する時代の思考様式にあったのではなからうか。

時は1904年、マックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』が出版された年にあたる。人々の意識にも物象化の影響が見て取れる。たとえば、ブルームにとり女性は「すっかりぬぐために着飾る」（13.799）存在で、彼は女性を包装された商品のように見ている。そのような彼にとり、女性は「いきのいい肉」（4.152）であり、「臀部後半球と胸部前半球」（17.2232）を持つ脂肪質である。また男女の関係は「二股のフォークと鋼鉄」（13.993）、もしくは「コルク栓と瓶」（15.1974）に過ぎない。ブルームも広告取りというイメージに関わる仕事に就いており、物象化の思考様式に汚染されているところが大きい。

一方、女性もそのような考えを当然のものとし、モリーも体重を減らし（18.450）、肌の手入れをし（18.462）、女性雑誌を参考に艶かしい下着で身を包み、自らを社会が欲望する存在に仕立てようとしている。雑誌には「豊胸器具」（15.3258）や「コルセット」（18.446）などの宣伝が載っていた。そして特に興味深いのは、第十八挿話の彼女の内的独白において、「かれ」という男性を指示する代名詞が、いずれの男性とも交換可能のごとく使用されていることである。

ポルノ

性の商品化ということであれば、その最も顕在的な存在はポルノであった。ヴィクトリア朝の後半期に夥しい数のポルノ小説が出版されていたことは、『我が秘密の生涯』の発掘で知られるスティーヴン・マーカスの『もう一つのヴィクトリア時代』（1966）が教えてくれている。ブルームがモリーのために借りるのもその種の本である。彼はマーチャント・アーチの古書店で、カウンターの背後のカーテンの影

から、めばしい本を出してもらおう。題して『罪の甘い歓び』。架空のポルノ小説らしい。こうした地下世界への取り締まりについては明らかではないが、借り賃が「1 シリング」(17.1465)であることを考えれば、ポルノ小説の入手は難しかったのであろう。海外旅行や出稼ぎ帰りの人々が、アイルランドに持ち込んだと思われる (Cairns & Richards)。

『ユリシーズ』には『罪の甘い歓び』以外にもポルノ小説への言及は多い。第十挿話でブルームが返却するエイミー・リード著『サーカスの花ルービー』(1889)、また彼の手にする修道院の暴露本であるマライア・マンク著『マライア・マンクの恐るべき告発』(1836)、あるいは彼のかつて読んだことのあるジェイムズ・ラヴバーチ著『うるわしい暴君』なども、同種の小説と考えていいだろう。テキスト中でそれとなく言及されている十九世紀末の匿名の作者による『乙女のあつかい方』(第十一挿話)、ならびにポール・ド・コック著『三着のコルセットをつけた娘』(第十五挿話)もポルノ小説である。そして被虐性愛の行状を描いたザッヘル＝マゾッホ著『毛皮のヴィーナス』(1870)は、まさしく『ユリシーズ』のテーマになりえている。

ポルノ小説の素材は様々である。『ダブリンの市民』所収の「小さな雲」において、ギャラハーがチャンドラーに向い、大陸の修道院の秘密の数々を暴露し、上流社会で流行している風習のいくつかを描写してみせ、さらにイギリスの公爵夫人の物語を語って聞かせている。修道院や上流階級の人々の秘密などは、ポルノの格好の素材であったのだ。その他には、レズビアン、男色、姦通、覗き、サディズム、マゾヒズム、近親相姦などを扱った作品もあった。たとえば、『ダブリンの市民』所収の「イーヴリン」は、ヴィクトリア朝の近親相姦を描いたポルノ小説、『イーヴリン』を念頭に書かれたであろう。フランス革命の折の自由の女神像にも示唆されているように、ポルノも政治と無縁ではない (Hunt)。

ポルノと言えば、すでに写真も流布していた。ブルームはソフト・ポルノの週刊誌『フォート・ビッツ』の猥褻な写真を寝台の上に掛けて楽しんでいる(第四挿話)し、応接間の彼の机の引出しには猥褻な写真が何枚か隠されている(17.1809)。酒場でも客たちがポルノ写真を楽しんでいる(第十二挿話)。同様にステイーヴンも、「暖炉の煙道」にいく枚ものポルノ写真を隠し、折々のぞき見していた(『若い芸術家の肖像』)。また彼はパリから、『ル・チュチュ』や『白いパンタロンと赤いキュロット』といった、ポルノ雑誌を持ち帰っている(3.197)。

さらに、男性専用の連続幻灯写真もあった。ブルームは、ケイベル通りでそれを覗いた折を回想しながら、「はちきれそうなタイトの夢。あれはどこで見たんだっけ？ そうそう。ケイベル通りの連続幻灯写真。青年男子のみ。覗きのトム。ウィリーの帽子で女たちは何をしたか」(13.794)と独白している。映画のレンズそのままに、この装置は、見る人＝男性、見られる人＝女性という、時代の力学を基礎にしていた。

こうしたポルノの問題点は幻想の世界に留まらず、欲望を喚起し、往々にして現実への投射に向かわせることである。ブルームがモリーに猥褻本を借りて来る裏には、妻にそのような気持ちを喚起させようという、密やかな動機が潜んでいるのではなかろうか。彼は妻の無知を矯正するのに、目立つ場所に書物の特定のページを開いたまま放置し、その潜在的知識を利用したり、第三者の無知を公然と嘲弄したこともある(17.693)。

教会と性の検閲

しかし、性に対する当時の規律は一般的には厳しく、結婚外の性的関係は厳しく批判されていた。『ダブリンの市民』所収「下宿屋」においても、35歳の堅実な独身男のドーランが、ふとしたことから下宿屋の娘と関係をつき、その責任を負うことになる。彼は教会での司祭への告解で罪の大きさを論される。そして葡萄酒商という教会と関わりのある職場に勤務している都合上、事態が世間に知られた場合には職を失うことになるかと心配している。彼の行為は不道徳と見做され、下宿屋の経営者ミス・ムーニーは、そのことを逆手に娘を結婚させることに成功する。

ここで、ドーランが結婚を決意するのに大きな役割を果たしているのが、何よりも教会であることに注意したい。彼が想起するところによると、聴罪司祭はミス・ムーニーとの顛末を細大漏らさず聞き出し、結婚という形での償いができることに感謝を抱いたほどであるという。同じくモリーも、コリガン神父に告解した際、やはり微に入り細にわたって告白を迫られた(18.107)。ミシェル・フーコーによれば、教会は告解という装置を用い、性という個人の秘匿する隠微な領域に対しても支配権を握っていたのである。さらに例を挙げるなら、ステイーヴンが娼婦との関係を告白した折の描写がある(『若い芸術家の肖像』)。あるいは生理を迎えた際の告白で、「髪のつけ根まで真っ赤」(13.454)になったという娘もいる。それどころか、子どもの存在に原風景を想起して、羞恥心で顔を赤らめる女性もいた。

カトリック教会は、信者たちの性生活、とりわけ女性の性生活を規制することで、社会秩序を維持しようとしていたのだ(Evans)。告解する女性信者をめぐるブルームの次の独白に、どことなく性的なニュアンスを感じ取れるとしたら、それは男性である司祭たちが告解を通して行使する性に対する支配があるからである。

告解。みんな告解したが。では何もかもお話しいたします。悔悛。どうかあたくしを罰して。大変な武器を握ってる。医者や弁護士どころじゃない。特に女はうずうずしている。それからあたくしシユシユシユシユシユシユ。それであなたはチャチャチャチャしたのですか？(5.425-8)

アイルランドの自治権獲得運動の指導者であり国民党の党首、チャールズ・スチュアート・パーネルの失脚を導いたのも教会であった。1889年12月24日、国民党の議員でもあったオシー大尉は妻に対して、パーネルとの不義密通を理由として離婚訴訟を起こした。このスキャンダルは人々に大きなショックを与え、一大センセーションを呼び起こし、しばらく後もアイルランドでは三角関係は危うい問題であった。だが、その背後でパーネルのみならず、アイルランド国民党をも窮地に陥れるのに最も力があつたのは、ローマ・カトリック教会である。この事実を忘れてはならない。

そのような教会の存在を考えると、「ジャック・パワーなんかはとくべつで女給をかこっている」(18.1272)という話題など、秘密以外の何ものでもない。そもそも、ブルーム夫婦がゲイアティ座で、イタリアのジュゼッペ・ジャコーザの劇『愛の悲しみ』の翻案『スカルリの妻』(1897)を観た際に、天井桟敷にいた男が「姦いんをあつかったふしだらなしばい」(18.1118)と批難し、「不ぎ女め」と怒鳴り声

をあげたほどである。モリーは「これがこのなみだの谷であたしたち女のするわるいことの全てなら大したことじゃないのは神さまがごぞんじ」(18.1517)と開き直るが、この芝居は、さえない弁護士スカルリの美しい妻が、夫の部下と恋に陥りながらも、子供のことを考えて思い止まるという話にすぎない。それでも当時の人々には危ういテーマであった。

このような状況を考慮するなら、モリーの不義は、教会の教えと教会が支持する家庭観に対する、重大な攻撃に他ならない。が、ブルーム夫婦には不義をめぐる罪への意識がほとんどないのだろう。二人は一般の人よりも信仰心が希薄であるのかもしれない。事実、ブルームは前回のミサのことも覚えていないほど教会から離れ、教会について「たしかにすごい組織、まるで時計じかけだ」(5.424-5)と第三者的な観察をしている。モリーもまた雷鳴に神の怒りを感じたと言いつつ(18.134)、性行為そのものの余韻に耽るゆとりがある。夫婦とも性に対してやはり開放的であるらしい。

教会と避妊

ブルームの意識は避妊に対する態度にも明らかだ。たとえば、ブルームはディーダラス家についてこう語っている。

ディーダラスの娘が……父親が出て来るのを待っているんだ。家庭というものは母親がいなくなると壊れてしまう。子供を十五人産ませた。ほとんど毎年生まれたわけだ。それがカトリックの教義なんだよ、さもないと神父はあわれな女に告解をじゃなくて赦免を与えてくれない。殖えよ、地に満てよ。そんな馬鹿な考え方があるかしら？ 家庭も家屋敷も食いつぶしてしまう(8.28)。

大飢饉以来アイルランドでは、経済的な理由から、独身で一生を過ごすか、結婚するにも晩婚である人が多かった。しかし結婚した場合には、「生めよ、殖えよ……」式の考えにより、多産が望まれ、概して大家族になっている。ブルームはそうした矛盾を言いあてているのである。そしてブルームの意見に呼応する共鳴テキストもあった。T. R. マルサスが1798年に『人口論』を発表してから、人口統制は十九世紀の合理主義者やフェミニストの支持を受け、今世紀には近代社会の個人的・家族的・社会的計画の不可欠の問題とされてきたのである(Evans)。実際、経済が好転する1960年代に到るまで、アイルランドは「マルサスの亡霊」に馮かれることになる。

アイルランドの人口減についての議論がなかったわけではない。それは第十二挿話における民族主義者「市民」の激烈な怒りにも明らかである。またジョージ・ムアの『未耕地』(1903)所収の「ローマへの書簡」の中でも、人口減対策として司祭の結婚を願う、ローマ教皇への手紙が問題とされている。だが、教会は経済を蔑ろにしたまま、多産を説く責任を負わなかった。ブルームは、子沢山のために零落したディーダラス家について語った後、さらに「神父たち自身には養う家族はないんだ。国の脂肪を食らって生きてるわけさ。彼らの葡萄酒蔵と食料貯蔵室。贖いの日のきびしい断食を、やらせてみたいものだ」(8.34)と皮肉を述べている。

ちなみに、1868年にトマス・ハスラムが避妊のパンフレットを著し、経済的な都合で子供を持ちたくない人に「安全な期間」を利用した性行為を勧めたことがある (Luddy)。この考えは一般にも流布しており、ブルームも「あれ (生理) のときやってはいけないのかな。はらむ恐れだけではない」(13.825) とつぶやき、ステイーヴンの友人リンチも、「一週間前には四日も病気で寝て居たのに、今日は寛いで、陽気で、危ないことにも笑ふ丈」(14.1150) と、恋人キティがその期間であることを利用して野外で楽しんでいる。

避妊は一般常識の範囲にあったわけではない。『ユリシーズ』第十四挿話の国立産婦人科病院での学生たちの猥談で、パノンはブルームの娘ミリーとの逢引きで、「雨外套」を所持していなかったことを後悔する。するとマリガンが「丈夫な外套をも貫く雨が降る」こともあると忠告をし、さらにリンチがそれよりも「雨傘」の方が快適だと恋人のキティが言っていると助言する。ここで「雨外套」も「雨傘」も「ドゥーブル・アンタンドル (double entendre)」である。それぞれ避妊の方法であるが、当時、いずれも一般の人々の常識の範囲内にはなかった。

にもかかわらず、ブルームは財布の中に一つ、また机の引出しに二つ避妊具を秘匿している。モリーもこの秘密を知っていて、時折それらが使用されていないか確認している。だが、避妊具はアイルランドでは禁止されていたし、その入手も容易ではなかった。ブルームが隠し持つ避妊具は「ロンドン市中央西区チャリング・クロス郵便局私書箱三十二号から通信販売で購入」(17.1805) したものであり、イギリスでもロンドン以外での入手は不可能であった。ブルームは性について好奇心が強く、そうした好奇心が彼の性病を招いているかもしれない。またその背後にある物象化のイデオロギーが、彼の病の源であるかもしれない。そうであるなら、一家の不幸も時代と連結している。

ブルームの性

おそらくモリーの不義の問題は、夫婦のある種の密約の上に行なわれたのではなかろうか。モリー自身も、「彼 (=ブルーム) があたしとあの男との仲をうたぐっていたからよ／彼だっておばかさんじゃないもの／食じは外ですませゲイアティ座へ行って来るからと言ったけれど」(18.81) と独白しているように、夫が自分たちのことを知っていることを知りながら、夫の教唆に応じているらしい。逆説的であるが、妻の不義を契機として夫婦の関係の修復が画策されているのではなかろうか。その答えはブルームの自慰にありそうである。

自慰も教会から罪とされていた。アイルランド人の純潔性を説くマッデンに、純潔なのは手でしているから、といった皮肉な答えをステイーヴンがする (『ステイーヴン・ヒーロー』) とき、彼の意識を捉えているのは教会の教えである。同様に、第十四挿話の国立産婦人科病院で、ステイーヴンが自慰を評して、「われらが夜な夜な、勢ひなきものになし果つる、神の御力にて勢ひあるべう魂はいかに。こは聖き霊と主にして生命の与へ主なる神とに逆ふ罪にこそあんなれ」(14.225) と語るとき、やはり教会の考えに捕われている。

にもかかわらず、「人はそれぞれおのが妻、または手のなかの新婚旅行」(9.1171) とマリガンは説く。

そしてブルームも高校時代に遠足に出かけた折ばかりか、家庭でも、さらに本日も若い娘ゲーティに海辺で欲情している。自慰は彼の習慣であるというが、彼は独身であるわけではない。だからこそ、彼は風刺家ジュニアスのような語り手によって、「家の近くに、耕し人のあらぬゆゑ作付けせざる田畑のあるものを。思春期の不埒なる習はしは第二の天性となりて、やがては中年の恥ぢとなるもの也」(14.929-31)と批難されるのである。

したがって、ブルームの海辺での自慰はモリーの不義と関係があると受け取れる。そもそも彼は朝から風呂に入り、自慰をしようと密かに計画していたらしい。細かい論証は割愛するが、彼の自慰は妻の不義への対抗策として行なわれているらしいからだ。モリーの「彼をうれしがらせる気はありません」(18.82)という独白は、ブルームがモリーの不義を黙認していることをボイランに教えないといった趣旨で、ブルームとモリーの間には不義についての合意ができていているらしい。すでに述べたように、ブルームは息子の死を契機として、性的不能に陥っている。彼はそのことで妻の不義を画策し、妻との関係を清新なものにしようとしたのではなかろうか。

フォークロア・ユーフィズム

アイルランドは、十九世紀から二十世紀半ばまでの約150年間、きわめて貞節な社会であったと言われてきた。が、それが「神話」であったことは、これまで述べてきた娼婦の存在に明らかであるし、その他の婚外関係のあったとの指摘からも想像できる (McLoughlin)。数多くのフォークロアの存在もそうした欺瞞を暴露している。鼻の大きさと性器の比例、オイスターは精力剤、ずんぐりした太い首は精力絶倫の印、などといった言い伝えがある。さらに、コックは男根のことで、モリーは作家のポール・ド・コックについて「あのあだ名は彼が女から女へとくだをたずさえてわたりあるいたのでつけられたのかしら」と訝る。また「公園で風邪を引いてしまつて。門があいていたから」(7.612)といった、「ドゥーブル・アンタンドル」もある。

逆に、検閲の存在を示唆するのが、ユーフィズムである。ゲーティは「おしり」という言葉に顔を赤らめ、便所を「例のところ」と呼び、生理や性行為を「あのこと」ですませ、下着のことをunmentionableと言う。モリーも猥褻な四文字語の一つをa-eと綴る。また「女の体の絵をそえてジブラルタルの岸壁に書いてあったあの言葉」というように、やはり四文字語の一つを「あの言葉」と表現している。さらに彼女は、プリンス・オヴ・ウェールズが少し早くジブラルタルへやってきていれば、「あたしが植えつけられていたかも」(18.502)といった言い方をしている。同じくブルームも、「フレンチ・レター」(13.877)と呼んだり、「おれの花火」(13.894)と言ったりする。

性とジョイス

ところで、教会は一夫一婦制という制度を説き、その下での「生殖的性行為」を支持していた。その前提に拠って立つとき、不義が容認されないだけでなく、諸々の性の形態が非難の対象とされた。その一方で、フロイト、クラフト＝エビング、ハヴロック・エリスらによる性の研究が進められ、性につ

いての新しい地平が開拓された。彼らは快楽を目的とした「異性性器愛」なる考えを説いた。そして当時、作者ジョイスはそれらの文献を熱心に読んだらしい。

ジョイスが宗教と断絶する契機になったのは性的問題である。彼は人間の精神を構成する性的本能への信仰を選び取り、神への信仰、そして教会の性の抑圧に別れを告げたということである (Brown)。こうしたジョイスの教会との訣別は、『若い芸術家の肖像』のステイーヴンに色濃く投影されている。彼はノーラへ宛てた 1904 年 8 月 29 日付けの手紙、ならびに 9 月 16 日付けの手紙でも、性的衝動のために教会に、そしてアイルランドに留まることができないと語っている。さらに翌年の弟宛の手紙でも、自身の性の自由のための亡命を正当化している。そしてジョイスのこの考えを最も雄弁に伝えているのがブルームである。

性に対するジョイスの見方は真摯なもので、決して偏執的なものではない。性はすべての人を支配する普遍的な働きである。彼はいみじくも、「私の心の井戸の性的部門にバケツを降ろしたなら、自分の水とともにグリフィス、イプセン、スケフィンソン、バーナード・ヴォーン、聖アロイシウス、シェリー、レナンといった水も汲み上げることになる」、と語っている。その限りでは、ジョイスの描く世界には性が隣り合わせにある。『ダブリンの市民』では、ミス・シニコー（「病ましい事故」）、マライア（「土」）、ファリントン（「対応」）の行動など、性的な不満が原因である (Brown)。

『ユリシーズ』が性的問題に大きく関わることを考えると、マリガンが物語の冒頭から黒ミサを演じて見せているのは興味深い。六月十六日は木曜日、最後の晩餐が開かれた日でもある。ユダの裏切りの始まりを示す日である。黒ミサは女性の体を使用し、葡萄酒ではなく血で祝福される。ブルーム一家の物語もそうした「大きな物語」に連結していよう。モリーの不義が息子ルーディの死を淵源とする夫ブルームの無気力によるのか定かではないが、ダブリンにおける性をめぐる事情は、二人の関係について何らかの示唆を与えていると思われる。ジョイスが性病に冒されていたことは公然の秘密である。

参考文献

- Anderson, G. Chester. "Leopold Bloom as Dr. Sigmund Freud." *Mosaic*, vol. 6, 1972-73.
- Beja, Morris. "The Joyce of Sex: Sexual Relationships in *Ulysses*" in *The Seventh of Joyce*, ed. Bernard Benstock. Bloomington: Indiana University Press, 1982.
- Brown, Richard. *James Joyce and Sexuality*. Cambridge: Cambridge University Press, 1985.
- Cairns, David and Shaun Richards. *Writing Ireland: Colonialism, Nationalism, and Culture*. Manchester: Manchester University Press, 1988.
- Carlson, Julia, eds. *Banned in Ireland: Censorship & The Irish Writer*. Athens: University of Georgia Press, c. 1990
- Chesney, Kellow. *The Victorian Underworld*. London: Penguin, 1972.
- Collins, Aongus. *A History of Sex and Morals in Ireland*. Cork: Mercier Press, 2001.
- Duffy, Enda. *The Subaltern Ulysses*. Minneapolis: University of Minnesota, 1994.
- Fagan, Terry. *Monte: Madams, Murder and Black Coddle*. Dublin: Printwell, 2000.
- Ferris, Kathleen. *James Joyce and the Burden of Disease*. Kentucky: The University Press of Kentucky, 1995.
- Finegan, John. *The Story of Monte: An Account of Dublin's Notorious Red Light District*. Dublin: The Mercier Press, 1978.

- Garvey, Johanna X. K. "City Limits: Reading Gender and Urban Spaces in *Ulysses*." *Twentieth Century Literature*, vol. 41, no. 1, 1995
- Gorgaty, Oliver St. John. *Tumbling in the Hay*. Dublin: The O'Brien Press, 1996.
- Hunt, Lynn. *The Invention of Pornography: Obscenity and the Origins of Modernity, 1500-1800*. New York: Zone Books, 1993
- Jones, Ellen Carol, ed. *Joyce: Feminism / Post / Colonialism*. Amsterdam: Rodopi, 1988.
- Low-Evans, Mary. *Crime against Fecundity: Joyce and Population Control*. New York: Syracuse University Press, 1989.
- . "Sex and Confession in the Joycean Canon: Some Historical Parallels." *Journal of Modern Literature* xvi, 4, 1990.
- Luddy, Maria. "Prostitution and Rescue Work in Nineteenth-Century Ireland" in *Women Surviving*, eds. Maria Luddy and Cliona Murphy. Dublin: Poolbeg, 1989.
- . *Women in Ireland, 1800-1918: A Documentary History*. Cork: Cork University Press, 1995.
- . *Women and Philanthropy in Nineteenth-Century Ireland*. Cambridge: Cambridge University Press, 1995.
- McLoughlin, Dympna. "Women and Sexuality in Nineteenth Century Ireland." *The Irish Journal of Psychology*, vol. 15, nos. 2 & 3, 1994.
- Marcus, Steven. *The Other Victorians: A Study of Sexuality and Pornography in Mid-Nineteenth-Century England*. London: Bool Club Associates, 1970.
- Mason, Michael. "Why is Leopold Bloom a Cuckold?" *ELH*, vol. 44, 1977.
- O'Flaherty, Liam. *The Informer*. London: Penguin, 1935..
- Sternlieb, Lisa. "Molly Bloom: Acting Natural." *ELH*, vol. 65, 1998.
- Wills, Clair. "Joyce, Prostitution, and the Colonial City." *The South Atlantic Quarterly*, vol. 95, no. 1, 1996.